ほんばこ　令和６年１月―２　家の人と話し合ってみよう

薦めてみる本　森鴎外『舞姫』（明治）

森鴎外『舞姫』は高校３年の現代文の教科書の定番教材だ。新課程の文学国語でも扱う。が最近は高校で扱わない場合も多いと聞く。理由は、『舞姫』の雅文体を読む力が今の高校生にない、多少古文の読める進学校でも受験を優先してしまう、新課程では単位の関係で論理国語と古典探究を取れば文学国語が取れない、といったことにありそうだ。これは実に残念だ。単なる受験勉強では得られない価値あるものを『舞姫』では学ぶことができる。

鴎外は明治大正期の作家・医師・軍人。１８６２（文久２）年石見（島根）の津和野の生れ。１９２２（大正１１）年没。長州陸軍軍閥に属し、東大医学部に学びドイツ留学、帰国後文学・医学などで戦闘的啓蒙を行う。陸軍軍医として出世した。代表作『舞姫』『阿部一族』『渋江抽斎』など。

若き鴎外は、ドイツに留学し、エリスという女性と出会い、帰国後結婚するはずだったが、周囲の反対で結婚できなかった。その事件が『舞姫』に影を落としているとしばしば言われる。

『舞姫』の主人公・**太田豊太郎**は、鴎外に似ているが少し違う人物だ。太田は役人となり役所の命令でドイツに留学し法律を学ぶことになる。やがてベルリンの裏町で**エリスという貧しい踊り子**と知り合う。真面目な太田は、遊興好きな周囲の陰謀によりかえって不品行とレッテル張りされ、免職になってしまう。太田はベルリンの裏町でエリスとともに暮らし、太田は新聞社の通信員、エリスは舞台ダンサーをしながら、少ない収入を合わせて食いつなぎ、「憂きが中にも楽しき月日」を送る。この間太田はジャーナリストとしてヨーロッパに関して一種の総合的な見識を有するに至った。やがて明治２１年の冬、**旧友・相沢**が**実力者・天方伯爵**とドイツにやってきた。相沢は有能なエリート官僚だ。相沢の紹介で太田は天方の知遇を得、帰国と出世の道が開けそうだ。相沢は太田に①能力を示して天方の信用を勝ち取れ。②エリスとの関係は慣習・惰性から生じたものであって、「人材」を知っての恋ではないから、関係を断て、と助言する。太田は自己決定ができないまま、結果として太田は相沢の助言通りに動いてしまう。太田は混乱の中で、エリスとお腹の子をドイツに残し、相沢の言うがままに日本へと向かう。日本へ向かう汽船がサイゴンの港まで来たとき、太田ははじめて己の数年間を振り返り、帰国の道を開いてくれた相沢に感謝しつつも、相沢を「憎む」一点の心を自覚する。

引っ掛かって読むべき所はいくつもある。ここでは一点のみ注目しよう。相沢は太田に、エリスとの関係は**「人材を知りての恋」ではないから「断て」**と言う。有能な官僚の世界を生きる相沢にとっては、下町出身の貧しいエリスは、有望な青年が正当に関係する（結婚する）相手ではなかった。留学先で出会った女にはお金を渡して別れればいい、と考えていた。そういう考えの男は当時多かった。在ベルリン日本人留学生たちの多くもそうだった。「人材」（ここでは家柄、才能という程の意味だろう）として価値がない、としてエリスは切り捨てられた。太田の、相沢に対する違和感の一つは、ここだ。太田は、**相沢的価値観（帝国日本建設に重きを置く価値観）**に対して違和感を持つが故に、**「相沢を憎む一点の心」**を持つ。今、エリスとお腹の子をドイツに残して帰国の途にある太田には文明の象徴たる巨大な客船の晴れがましい白熱電灯も、空しく空虚なものと感じられる。太田はベルリンの裏町に大切な忘れ物をしてきた。国家や出世や才能や家柄や民族からも自由なベルリンの裏町で、エリスと肩を寄せ合うようにして生きた日々。そこでは太田は**愛と自由とヨーロッパの根本精神**に触れえていたかも知れない。だが、その価値を相沢たちは理解せず、いや太田自身がその価値の実感は摑んでいても本当には論理化できていず、ベルリンで貫徹することもできなかったし相沢に反論することもできなかった。このままでは、

帰国後の太田の人生は空虚なものとなるであろう。いや、帝国主義のシステム下にある人々のあり方自体が空虚なのだ。人間として大切な何かを踏みにじったまま、相沢（そして天方も）的官僚に主導されて日本は富国強兵殖産興業、**富国強兵にして民の幸薄い表面的文明化西洋化路線**をひた走った。それは帝国主義システムが崩壊して高度成長システムに移行しても同じだった。二つのシステムを通じて「人材」ではないエリスは踏みにじられ無視され捨てられ続けた。太田は人間的な生を選ぶことができなかった。相沢は人間的な生の何たるかを理解しなかった。日本全体が大きな誤りに陥っていた。私（あなた）が踏みにじってきたものは何か？　ではどうすればよいか？　**明治以降の近現代１４０年のシステムを相対化し私（あなた）の生き方を社会のあり方を問いかける射程を持った作品だ、『舞姫』は。**

サイゴンで手記を書き終えた太田は（『舞姫』を読み終えた私（あなた）は)、すでにこのことに気付いた。太田は、相沢（および相沢的価値観＝帝国を優先する価値観。富国強兵にして民貧しき帝国建設を優先し、人間にとって大切な愛や自由を踏みにじる）こそが問題だった、と問題を焦点化する。「憎む心」とはそういう意味だ。では、太田は（私やあなたは)、どうするのか。鴎外は日本で戦闘的啓蒙に従事した。実在のエリスとの文通は続いた（**六草いちか**が調べ上げている)。太田は、サイゴンで船を降りてドイツのエリスの元へ戻る手もある。そこでおなかの子を育てる、おなかの子は西洋と日本を結ぶ人に育つだろう、と読んだ人もある（授業で飛び出した意見。教室はスタンディングオベーションで拍手の嵐となった)。

グローバル化する世界の中で時代社会を問い人間の生き方を問う『舞姫』は、『こころ』と並び、**世界文学**の一冊として推薦するに足る作品である。

（森鴎外のほかの作品）

『於母影（おもかげ)』(M22)：鴎外 27 歳。西欧の詩の翻訳。浪漫的と言われる。日本の伝統は漢詩と和歌だったが、鴎外ほかの努力で西洋の詩が紹介され、日本近代詩が生まれることになった。

『キタ・セクスアリス』(Ｍ４２)：鴎外４７歳。学生時代のことが書いてある。外国語習得の方法も書いてあり参考になる。

『青年』(M43)：大学生・小泉純吉をめぐる青春小説。当時、夏目漱石『三四郎』(M41)、島崎藤村『春』(M41)、田山花袋『田舎教師』(M42）など、青年の煩悶を扱った青春小説が競うようにして出された。青春とは、「いかに生きるか」であり、哲学、倫理学、文学であり、恋愛と理想を考えることだった。

『雁』(M44)：鴎外４９歳。主人公・岡田はエリート帝大生。不忍の池への散歩道で出会うお玉（金持ちの囲い者）と淡い心の交流を感じるが・・？

『興津弥五右衛門の遺書』(T1)：鴎外５０歳。乃木殉死に感動して直ちに書き上げた一冊。

『阿部一族』(Ｔ２)：鴎外５１歳。殉死を扱っている。熊本の阿部一族は団結して滅亡する。鴎外は明治末以降古き良き武士道日本への郷愁に傾斜した。

『大塩平八郎』(T3)：鴎外５２歳。陽明学を実践し蜂起した大塩を描く。幸徳秋水事件への関心から、政府批判を込めたとする解釈がある。

『安井夫人』(T3)：鴎外５２歳。安井息軒（仲平）は昌平黌の大儒者。その妻に光を当てる。

『高瀬舟』(T5)：鴎外５４歳。道徳の教材につかわれることもある。

『渋江抽斎』(T5)：鴎外５４歳。史伝。江戸末期の無名の町医者を調べ上げて浮かび上がらせる。鴎外は本当は無名でも一隅を照らすこのような生き方がしたかったのではないか。(安井)